沖縄地理学会会報●第 54 号

2011 年 6 月 16 日発行

編集・発行 沖縄地理学会 ©　発行人 前門 晃
OKINAWA GEOGRAPHICAL SOCIETY (OGS)
事務局　〒903－0213 沖縄県中頭郡西原町字千原 1 番地
琉球大学法文学部地理学教室内 廣瀬 孝研究室気付
電話 098－895－8191
http://www.cc.u-ryukyu.ac.jp/~chiry211/
振込口座　02040－4－4697

平成 23 年度定期大会・総会のお知らせ(第 2 報)

7 月 30 日(土)沖縄大学で／発表申込締切は 7 月 11 日(月)

平成 23 年度定期大会・総会は，前号（53 号）で 7 月 23 日（土）開催とお知らせしましたが，諸般の事情で 1 週間ずらして 7 月 30 日（土），沖縄大学 2 号館 306 教室において，下記の日程で開催することになりましたので，お知らせいたします。なお，一般研究発表（口頭発表，ポスター発表）を希望される方は，下記に従ってお申し込みくださいますようご案内いたします。

記

●会期　2011 年 7 月 30 日(土曜日)

午前　一般研究発表（口頭発表／ポスター発表）ならびに総会

（※開始時間は，発表件数により調整いたします）

14:00～17:00　シンポジウム「石灰岩地域を知る最初の一歩」

■総合司会：崎浜 靖（沖国大）
■オーガナイザー／趣旨説明：前門 晃（琉球大）
■基調講演：上原 冨二男（沖縄大）「石灰岩地域の自然と人」
■講演 1：名城 敏（沖国大）「石灰岩地域の土壌特性」／コメンテーター：小川 護（沖国大）
■講演 2：田代 豊（名桜大）「石灰岩地域のジオツアーの実践」／コメンテーター：尾方隆幸（琉 球大）
■講演 3:我那覇 念（浦添高）「石灰岩地域と世界遺産」／コメンテーター：上江洲 薫（沖国大）
■パネルディスカッション（前門・名城・田代・我那覇）（演題は仮題）

17:30 頃～　懇親会（会場と時間は後日発送のプログラムでご案内いたします。会費は 2000 円程度）

●一般研究発表(口頭発表／ポスター発表)の申し込み方法，申込締切

（1）発表者名，（2）発表タイトル，（3）口頭発表またはポスター発表のいずれかを明記してください。発表要旨は発表申込み時には必要ありません（大会後に改めてご執筆をご依頼申し上げます)。口頭発表の発表時間は 15～20 分程度を予定しています。発表希望者は，7 月 11 日（月）までに，つぎの学会事務局に申し込んでください。

●事務局　〒903－0213 沖縄県西原町字千原 1 琉球大学法文学部　廣瀬 孝(電話:098－895－8191，E メール: thiro@LL.u-ryukyu.ac.jp)

一枚の図で語る地理トピック　#01

全国一の生産額をほこる沖縄本島の電照小ギク

小 川　護

沖縄県における電照ギク生産は，2006 年には 129 億円の生産額を上げ，とくに小ギクの生産では，全国一の生産地域を形成している。

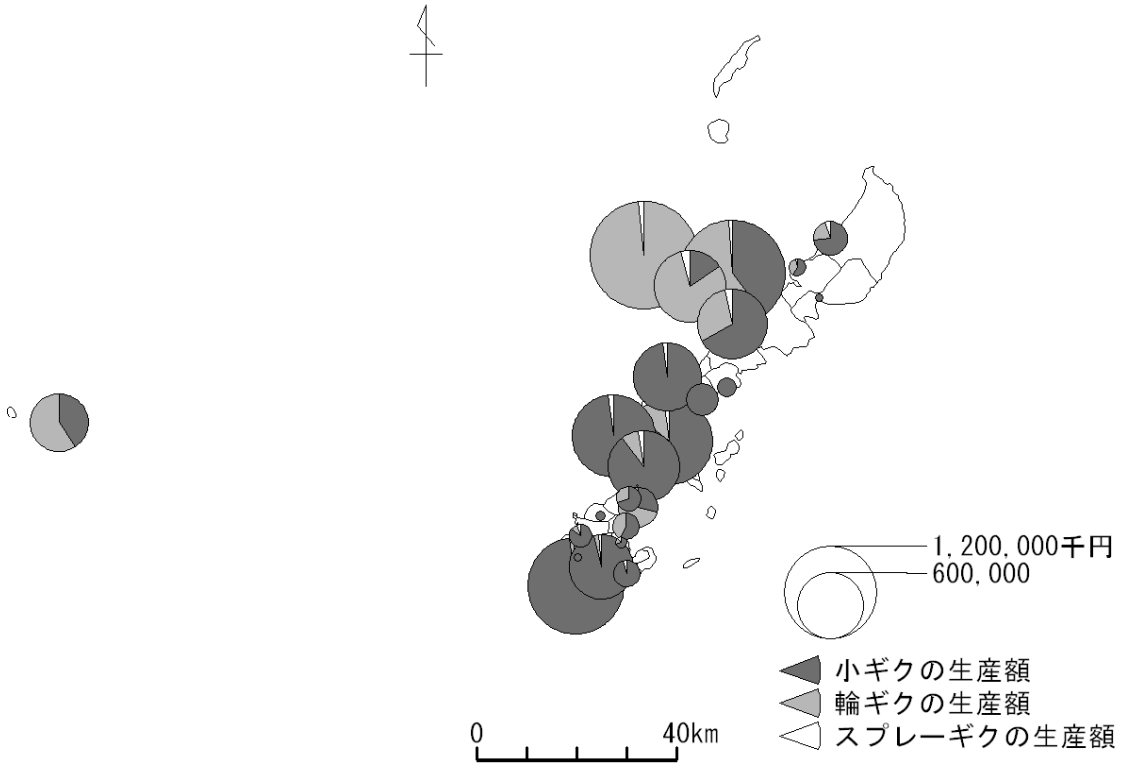
沖縄県におけるキク類生産地域の形成過程をたどってみると，1974 年，恩納村喜瀬武原の宮城康吉氏によって，航空機による電照ギクの本土市場出荷が試みられ，本土市場から沖縄産露地電照ギクとして品質の面で高い評価を受けたことに始まる。

さらに，1976 年には，任意の出荷組織である沖縄県花卉園芸組合（現在の沖縄県花卉園芸協同組合＝太陽の花）が組織された。1978 年からは，沖縄県経済連も生産出荷事業で「おきなわの花」というブランド名でキク類の出荷を開始した。その後は試験研究機関，生産出荷組織の努力と同時に，沖縄振興開発計画に基づく数多くの施策（農業構造改善事業，産地整備育成事業）が展開され，共同利用施設，集出荷施設，輸送用冷蔵コンテナなどの生産基礎条件の整備が進展した。1983 年からは，春の彼岸時には，生産出荷組織が，京浜市場出荷向けを中心として，航空機によるチャーター輸送が開始されるなど，花卉生産は順調な伸びを示している。1980 年代に本島全域において，電照を利用したキクの産地が散在して形成されるようになった。1980 年代後半には，後述のように，伊江村，今帰仁村，名護市，うるま市（旧具志川市），糸満市などで比較的まとまったキク類の産地が形成されている。2006 年現在，沖縄県における花卉栽培農家数 1762 戸，花卉類の栽培面積は 1170 ha を数える。

図に示したように，2006 年現在のキク類の生産額について，輪ギク，小ギク，スプレーギクの種類別にみると，沖縄県における第一のキク生産地域である伊江島の場合，キク類の生産額が 16 億 5 千万円でそのうちの 98 %が輪ギクの生産に向けられている。さらに，第二位のキク類生産地である今帰仁村の場合には，キク類の総生産額 15 億円のうち，輪ギクが 58 %の 8 億 8 千万円，小ギクが 42 %の 6 億 4 千万円である。そしてそれ以外の名護市や中南部の代表的なキク類生産地域は，電照栽培による小ギクの生産が圧倒的である。すなわち，沖縄本島の場合，キク類生産の種類別地域分化が認められる

たとえば伊江村の場合，輪ギク生産が特化している背景として，天水に頼っている農業用水の事情がある。すなわち，単位面積あたりにおける限られた水量の有効利用として小ギク生産よりも収益性のある輪ギク生産導入が 1981 年から試みられ定着したことにあった。2003 年現在，伊江村の輪ギクは生産農家数 103 戸（花卉園芸農協参加者 90 戸，JA 沖縄参加者 33 戸）で「太陽の響」や「新世紀」といった黄色系の品種を中心に市場に出荷している。一方，中南部の産地は，比較的栽培の容易な小ギクを中心とする生産に重点が置かれている。

最近の動きとしては，白ギクやスプレーギク



▲沖縄県におけるキク類出荷額（2006 年）。沖縄県農林水産部（2008）「沖縄県の園芸・流通」より作成

（スプレーマム）は，アジア圏からの輸入が年々増大し，市場関係者の話では，今後，早晩小ギクの輸入も増えてくることが予想される。そこで，このような情勢に対処するため，今年から第一回目として 2 月 21 日～25 日に関西地区を中心に，市場で春の彼岸用ギクの高品質を直接アピールするキャンペーンを展開し，販売促進に働きかけている。これからも，沖縄農業を支える主幹作物の一つとして，その発展が期待される。

（5 月 25 日受付）

●2011 年度沖縄地理学会 第 7 回地理教育シンポジウム

日時：9 月 10 日（土）午後を予定／場所：沖縄国際大学 7-201 教室。
※詳細につきましては，日程が近づきましたら，別途ご案内致します。

●沖縄地理学会の「ロゴマーク」公募 —— 締切 6 月 30 日

前号で募集を呼びかけました本学会のロゴマークの締切が間近に迫ってまいりました。まだ間に合います。あきらめずに是非チャレンジしてください。一つでも多くのよい作品を待ちしています。応募方法等は 53 号 10 ページをご覧下さい。

●本会報の「愛称」を募集中 —— 7 月 15 日まで受付中

前号（12 ページ）でお知らせいたしましたが，本会報の「愛称」を募集しています。すでにいくつか寄せられていますが，7 月 15 日頃まで受け付けますので，いい名前がございましたら，事務局までご提案くださいませ。

シマの定義

崎浜　靖

観光地として認識されている現在の沖縄では，他者視線の「島（シマ）」の認識が強い印象がある。例を挙げれば，島人（シマンチュ）Ｔシャツなどに表象されている「シマ」は，まさに他者視線の「シマ」を意識して作成されたものと考えられる。

この件について考えるようになったのは，数年前，ある高齢の方から「近頃の沖縄では『シマ』の意味を間違って使用しており，この最たるものが，島人（シマンチュ）Ｔシャツである……」ときびしい指摘を受けてからである。この方は，「シマ」とは生まれ育ったムラ（集落）を指し，故郷を等しくする者の意味を内包する言葉なので，他者視線による島（island）＝島人（シマンチュ）には違和感があるとのお話であった。続けて，「シマンチュ」という場合は，集落内の共同体社会を共に営んだ者が発する「内発的な言葉」であると……。

しかし，現在の沖縄では「シマ」と言うと，文字通りに島（island）と，村（ムラ）・集落などの社会組織の基礎単位である「シマ」を指す場合があり，「シマ」の定義が曖昧になっていることも事実である。そこで，よく立ち止まり考えてみると，私はこの「シマ」概念を明確に定義することも必要かもしれないが，むしろそれを逆手に取って，やや曖昧なままに沖縄の地理学研究の柱に据えることが必要ではないかと考えている。

私がこのような認識に至った理由は，これまでの（少しばかりの）フィールドワークの中で，「シマ」を丸ごと理解することが難しいと判断したからである。「シマ」には，そこに住む人々の日々の営みがあり，それぞれの言葉があり，それらが積み重なって「シマ」の歴史になる。さらにその歴史を刻んだ舞台（自然環境）もある。そのような多様な「シマ」を，フィールドを通して認識してきたからである。それゆえに，「シマ」の定義を明確に定めてしまうと，逆に総合科学としての地理学の持ち味が薄れる危険性を孕んでいるからである。それに加えて，私自身のフィールド体験からくる「シマ」の多様性および多義性ゆえの「畏れ」の気持ちも含まれている。

地理学はよく言われるように総合科学であり，また学際的・文理融合型の学問である。「シマ」の研究を行うには，シマの自然史（成り立ち）に関するアプローチがあり，「シマ」の生活様式や地域性を検討するアプローチがある。前者は主に自然地理学が担い，後者は人文地理学が担っているといっても過言ではない。このような多様な「シマ」研究を統合するには，総合科学としての地理学が最も適していると考えている。

文理融合，学際的な一見アプローチの異なる「シマ」研究を，例えば，GIS（地理情報システム）を活用しながら地理的・歴史的事象を統合することで，これまで明らかにされなかった立体的な「シマ」が見えてくる可能性もある。それはまた，「シマ」の「内側からの視点」と「外側からの視点」のゆがみを解消する手立ても構築できるのではないかと，私はこれからの地理学の展開に，ひそかな期待を寄せる一人である。

（5 月 31 日受付）

編集子付記●崎浜さんは，これまでの「シマ」研究の一端を，『週刊かふう』（琉球新報社）の「うちなぁ点描」において，「シマの景観にふれる」と題しエッセーを掲載中です。これまで，5 回まで掲載されました。第 1 回：沖縄の集落景観研究の概要（2011.01.28）／第 2 回：屋取集落を訪ねて（02.25）／第 3 回：集落・民家の方位（03.25）／第 4 回：民家の景観構成（05.07）／第 5 回：屋敷林の特性（06.03）。

2010 年度 県内巡検報告

3 月 20 日（日）午後 1 時～午後 5 時頃まで，「県都那覇の今と昔を歩く」というテーマのもと，濱里正史会員・上江洲 薫会員・上原 冨二男会員の案内で県内巡検が開催された。

参加者は 11 名。当日は，天候にも恵まれ，久しぶりの徒歩巡検ということもあり，参加者は充実した時間を過ごすことができた。コースは，13 時に那覇バスターミナル，「仲島（なかしま）の大石（うふいし）」前に集合。ここで旧海岸線について説明があり，その後，国際通りとその周辺にて，国際通り周辺の今昔や国際通り裏のいわゆる「不良住宅群」（牧志地区）などについて観察した。さらに 2009 年 8 月の鉄砲水による事故現場も含むガーブ川（雨水排水路）について観察した。また，途中，カーブ川沿いの水上店舗や農連市場も見学して，ジュンク堂書店裏で解散した。

お忙しいところ巡検をコーディネート，ご案内下さった 濱里会員・上江洲会員・上原会員，当日ご参加下さった会員の方々に厚くお礼を申し上げます。　（集会担当　小川）

1　那覇バスターミナル仲島の大石前にて

2　中国，銀聯カードの使用できることを示した幟（のぼり）の説明（浮島通り）※中国からの観光客が近年増加している。

3　カーブ川沿いの水上店舗（開南地区）

4　国際通り裏のいわゆる「不良住宅」（牧志）

目崎茂和氏が講演――例会報告

2010 年度第 5 回例会は，2011 年 3 月 5 日(土)，午後 4 時 30 分～6 時，沖縄国際大学の協力をいただいて，同大学 5 号館 107 号教室において，南島地名研究センターとの連名で開催した。ちょうど，昨秋『古事記の法則』を上梓され，またこの春，南山大学定年退職を迎えつつあった目崎茂和氏を講師に招き，「沖縄・琉球・日本・倭の神話風水地理――『古事記の法則』からみた沖縄風水地理」と題して講演を聴いた。

司会（渡久地）による講師紹介のあと，当学会の前門晃会長が挨拶した。「目崎先生は，大学院では川の堆積物の研究で博士号を取られた。琉大に赴任され，沖縄には川らしい川がない。そこで，非常に悩まれた末に，島やサンゴ礁の研究をされ，さらに三重大学に移られる前に風水の研究に着手され，伊勢志摩でそれを醸成され，南山大学で研究が大きく〈花〉開いた。この間，大変なご苦労もあったかと思いますが，今日の講演では，研究の集大成，つまり〈花〉の部分を堪能できると思います」と述べた。

講演は，石垣島白保の集落立地を地理風水から読み解くことから始まった。そして，現代の風水ブームの発火点を香港とし，北京空港の風水モニュメントなど多くの事例を俎上に載せながら持説を展開された。現代の風水も，その始原は殷・周（紀元前 10 世紀）の「甲骨文字」ト占術と漢字の発達に遡り，「上は天文を極め，下は地理を察する」という，「天地合一」の天文地理・自然・環境観に求めることができるという。その後，郭璞（紀元 3 世紀）の『葬経』で体系化され，「気は風に乗れば散り，水によれば止まる……」と記している。そこから地勢説と方位説が生れる。指南（司南）による羅盤の発明・発達，山水図＝風水図の誕生，さらに地図の発達とも深く関係する。

風水とは「蔵風得水」で運気を取り入れることと関係し，華南・朝鮮・沖縄では「風水」だが，日本本土では「風土」，華北では「水土」で，みな「自然＝環境＝地理」を意味する言葉だ。風・水・土は自然環境の三層構造，気圏（atmosphere）・水圏（hydrosphere）・地圏（lithosphere）であり，自然環境（生態系）の基本概念を構成する。人と生物は風水土の循環の中で共生する。西洋の名画，ボッティチェルリ「ヴィーナスの誕生」にも風の神，大地母神が描かれ，風水土の考えと無縁ではない，という。

講演会には 40 人余の参加者があり，皆「気」をもらい，さらにレストランパブロでの懇親会では田中健二さんの美味しい料理をご馳走になり話に花が咲いた。（文責：編集子）

●書●評●

中山修一・和田文雄・湯浅清治 著『持続可能な社会と地理教育実践』

2011 年 1 月 10 日/古今書院発行/B5 判 262 頁/5600 円＋税/ISBN978-4-7722-4143-4

これからの地理教育を考えるための画期的な本が出版された。グローバル化する社会で，地理教育はどんな役割を果たし貢献できるのか。本書にはその答えが含まれている。

タイトルの「持続可能な…」は「sustainable」の訳語で，1987 年「環境と開発に関する世界委員会（ブルントラント委員会）報告書」で使用された「持続可能な開発 sustainable development」が最初であり，1992 年リオネジャネイロ・環境サミットを経て国際的合意となる。けれども，ここには相反する 2 つの概念が含まれる。すなわち sustain には「現状維持」，development には「現状を変える」という意味がある。したがって環境に関しては sustain しながら，貧困からは地球全体を「開発 development」することを目標としている。次の 2002 年ヨハネスブルグ・環境サミットで日本は NGO と共同して「持続可能な開発のための教育」を提案，各国の支持を得て国連総会で「国連持続可能な開発のための 10 年＝DESD（2005～2014 年）」が決議された。

その結果 sustainable の概念は教育分野にも導入され「持続可能な開発のための教育（ESD）」として注目された。わが国ではまず環境教育・開発教育の分野で取り組みが進んできた。しかし，最も貢献が期待される地理教育分野ではまだ遅れている。この状況を打破するためにも，地理教育分野における教材と基本資料の開発が緊急の課題である（まえがき）。本書は地理科学学会・地理教育 ESD 研究グループの 16 名による執筆で，構成は，1～5 章：理論編では地理 ESD 開発，新学習指導要領との関係，現職教育特別参加制度など。6～19 章：実践編，幼稚園・小学校（ゴミ，リサイクルの学習例）。中学校（地誌，資源，地域問題など）。高校（ダム開発，ドイツ再統一，持続可能な都市化）。大学（パーム油経済開発，地誌教育）。20～26 章：海外編（独英米中の ESD 事例）。27～28 章：評価論編（DESD 国別指標プロジェクト，ボン宣言）となっている。

国際社会における ESD 教育分野での日本への期待は高まっている。ようやく文部科学省もこの概念を「持続可能な社会」の学習として学習指導要領に取り入れた。これは地理教育にとって「追い風」である。先進各国ではこの領域で優れた教育実践を示し，リーダーシップを取るのは地理教員が多い。本書が日本の地理教育活性化への起爆剤となることを期待したい。

（西岡尚也・琉球大学）

●新刊案内●

須田郡司 著『世界石巡礼』

2011 年 5 月 18 日/日本経済新聞出版社発行/四六判 254 頁/1900 円＋税/ISBN978-4-532-16788-2

10 年ほど前，上江洲薫さん（沖国大）に誘われて，東村エコツーリズム協会の方々と一緒に，村内の自然を見てまわったことがある。それは，ツアーガイドらの野外勉強会であった。宮城海岸に，石の中に別の石が入っている不思議な岩がある，その成因を知りたいという。干潮時，宮城集会所うしろの険しい海崖を下り，ポケットビーチをいくつか越えて，問題の岩にたどり着いた。見たらコアストン（core stone）だった。嘉陽層砂岩の節理（岩石の割れ目）に染み込んだ水によって，節理の部分から風化が進行し，中央部は最も風化が遅れ新鮮な岩石を残している。そのため，あたかも岩石の中に別の岩石が嵌め込まれているかのように見えるのだ。

須田郡司著『世界石巡礼』のなかの石にも，風化が関与して生成された思いがけない形と色を呈した石が少なくない。本書の最後の所に断ち落とし見開きで印刷された朱色に耀く卵形礫（egg-shaped boulders），オーストラリアのデビルズマーブルズ（Devils Marbles Conservation Reserve）もその一つだ。「ガイドのビルはどのようにしてこれらの石ができたかを説明してくれた。風雨の力で溶岩が冷え，固まった花崗岩が数百万年の時を経て風化し，浸食を繰り返してこのような形になったのだという。（中略）しばらく移動すると，また別の巨石群があった。積み重ねられたように見える奇石，卵を立てたような巨石（中略），巨石マニアにはたまらない所だ」（p. 237）。

「桂林から昆明行きの列車に一六時間揺られ，午前九時半に到着する。途中，休憩はあったが，さすがに疲れた。／石林駅から石林公園までミニバスに乗ると，車窓の向こうに巨石群が見えてきた。私は思わず目をきょろつかせてしまい，興奮を抑えることができなかった。（中略）二〇〇四年二月一三日，パリのユネスコ本部で開かれた『世界地質公園選抜大会』で，石林は世界初の世界地質公園（ジオパーク）の一つに選ばれた」（p. 32）。

須田郡司さんは，琉球大学法文学部地理学専攻を卒業した，石を専門に撮り続ける，世界的に有名になった写真家である。須田さんの石巡礼の見事な写真もさることながら，添えられた短い文章のなかにさりげなく記された石たちの生成誕生についての語りには，豊かな自然学（地形学）の素養が秘められてある。

1 年間で世界 40 ヵ国に七十余の巨石を訪ねた，奇跡の巡礼。本書は，石の〈自然史〉ではなく，じつは，石をめぐる〈精神史〉である。

（編集子）

●会員が関わった本●●●○

事務局に情報提供のあった本を発行順に紹介いたします(敬称略)。今後とも情報提供をお願いいたします。価格には消費税が含まれていません。

―――――――

●蛯原一平・安渓遊地＝編 『**いくさ世をこえて――沖縄島・伊江島のくらし**』(聞き書き・島の生活誌⑥), ボーダーインク, 2011 年 2 月 12 日, A5 判, 114 頁, 1000 円。

＊会員の渡久地健が「第 2 章: そしてユッパーが消えた」(当山昌直との連名)を分担執筆。

●安渓遊地・当山昌直＝編 『**奄美沖縄環境史資料集成**』, 南方新社, 2011 年 3 月 10 日, A5 判, 842 頁, DVD 付。9800 円。

＊会員の渡久地健が「サンゴ礁の民俗分類――奄美から八重山まで; 付論　サンゴ礁漁場の民俗語彙」, 「ヘタ／ピザ考――地名をして語らしめよ」を分担執筆。

●湯本貴和＝編, 田島佳也・安渓遊地＝責任編集 『**島と海と森の環境史**』(シリーズ日本列島の三万五千年――人と自然の環境史 4), 文一総合出版, 2011 年 3 月 20 日, A5 判, 352 頁, 4000 円。

＊会員の渡久地健が「第 11 章: サンゴ礁の環境認識と資源利用」を分担執筆。

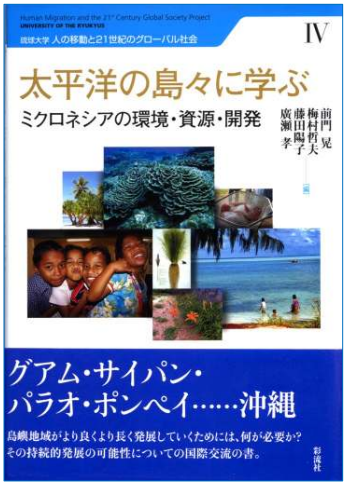
●前門晃・梅村哲夫・藤田陽子・廣瀬孝＝編 『**太平洋の島々に学ぶ――ミクロネシアの環境・資源・開発**』, 彩流社発行, 2011 年 3 月 31 日, A5 判, 237 頁, フルカラー, 3500 円。

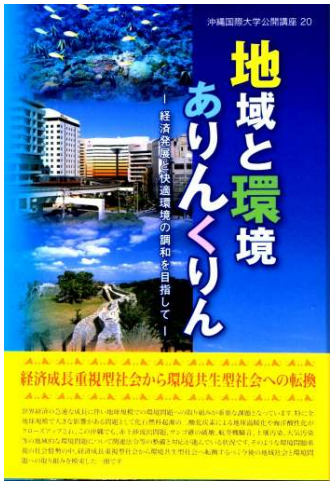
＊会員が関わった章はつぎのとおり。「まえがき」(前門晃), 「第 1 章: ベチベルソウによるより良い流域管理――グアム島南部の土壌侵食・土砂流出を防ぎ, 水質・サンゴ礁環境を守る試み」(M. H. ゴラビ／前門晃訳), 「第 4 章: グアム島, サイパン島の地形と人口」(前門晃), 「第 5 章: 沖縄島, グアム, サイパン, パラオにおける水資源と水利用に関する一考察」(廣瀬孝), 「第 7 章: グアム, パラオの漁業――サンゴ礁とのかかわりを中心に」(渡久地健), 「第 9 章: ベチベルソウを用いたグアム南部開発地域の流域管理技術」(M. H. ゴラビ／前門晃訳), 「第 10 章: サイパン礁湖の漁業資源に与える異常水銀の影響測定――予察的評価」(G. R. W. デントン／渡久地健訳), 「第 11 章: ポンペイ島の流域管理」(S. コーズローパナ／廣瀬孝訳) 。

●沖縄国際大学公開講座委員会＝編 『**地域と環境ありんくりん――経済発展と快適環境の調和を目指して**』, 沖縄国際大学公開講座委員会発行, 東洋企画発売, 2011 年 3 月 31 日, 四六判, 268 頁, 1500 円。

＊会員の上江洲薫が「持続可能な観光と環境保全」, 小川護が「沖縄本島と沖永良部島におけるキク類生産の現状と課題」, 名城敏が「沖縄の自然環境と環境問題」を分担執筆。

●須田郡司＝著 『**世界石巡礼**』, 日本経済新聞出版社, 2011 年 5 月 18 日, 四六判, 255 頁, フルカラー, 1900 円。 ＊前著『日本石巡礼』の姉妹編。





卒論・修論

●琉球大学大学院人文社会科学研究科修士論文（2010 年度）

甕岡紘幸「慶良間海域におけるダイビング観光による海域利用」

菊池孝如「沖縄本島における管理型墓地の実態」

●琉球大学法文学部卒業論文（2010 年度）

小野孝輔「市街地・米軍基地に隣接する戦後の一集落の変容とその経過――喜友名集落を事例として」

金城勇摩「闘牛地域間ネットワークの形成――牛の売買によって作られるネットワークに着目して」

平良幸美「宮古島における地産地消の取り組みと存立要因」

玉城玲奈「沖縄島本部山里の円錐カルストを構成する石灰岩の物理的風化作用に関する研究――野外における岩石表面温度の観測と熱風化に関する室内実験」

宮平貴代「那覇空港発国内募集型団体旅行の観光ルート分析と設定プロセス」

森根直朗「沖縄戦後の宮城島住民の経済活動の変容」

渡壁卓磨「マレーシア・サラワク州ラジャン川における河岸侵食の形状と分布」

●琉球大学教育学部卒業論文（2010 年度）

高平康佑「福沢諭吉の世界認識と現行の教科書が与える世界認識の比較研究――『世界國盡』と中学校社会科地理を中心に」

道下広明「静岡県牧之原市における茶業収益の現状と課題――牧之原市勝間田開拓農業協同組合を例として」

●沖縄国際大学経済学部卒業論文（2010 年度）

金城寿徳・春田晃嘉「南風原町における『つかざん完熟カボチャ』生産について」

津波古真哉「県内における金属リサイクルについて――循環型ビジネス構築にむけて」

大城逸人・天願晃斗「うるま市安慶名地区における都市開発について」

比嘉淳太・山内貴史「宜野湾市における米軍基地の返還と地域振興・都市計画」

諸見正太「離島の架橋などにおける人口変動や産業構造への影響について――浜比嘉島を事例として」

山城和樹「金武町における地域振興策」

儀部真澄・冨里盛博「沖縄県名護市屋部地域における地名・歴史・文化についての考察」

新城潤・比嘉健太・福原諒「沖縄の豊かさと労働意識――ウチナー文化を通じて」

会員消息

活動日誌

▼2011/02/02（水） 2010 年度第 4 回幹事会（琉大法文学部 209 教室，18:30～） 議題：①『沖縄地理』11 号の発行（原稿の募集）／②2011 年度の大会（日程，開催場所）／③ロゴマークの募集／④今後の例会等について

▼2011/03/05(土) 2010 年度第 5 回例会（→6 ページ）

▼211/03/20（日） 巡検「県都那覇の今と昔を歩く」（→5 ページ）

▼2011/04/06（水） 2010 年度第 5 回幹事会（琉大法文学部 209 教室，18:30～） 議題：①『沖縄地理』11 号の発行（原稿の投稿状況）／②2011 年度の大会（日程の変更，開催場所，シンポジウム）／③会報 54 号以降の内容，体裁の変更／④今後の例会等について

▼2011/04/13（水） 『沖縄地理』編集委員会（琉大法文学部 209 教室，18:00～20:00） 投稿原稿の確認と，閲読者担当者の分担決定。

▼2011/05/18（水） 『沖縄地理』編集委員会（琉大法文学部 209 教室，18:00～20:00） 査読結果の報告と投稿者への連絡。投稿者への閲読結果の発送手配。

▼2011/06/01（水） 2010 年度第 6 回幹事会（琉大法文学部 209 教室，18:30～），議題：①『沖縄地理』11 号の発行（原稿の査読状況）／②2011 年度の大会（シンポジウムの具体的内容）／③会報 54 号の内容／④今後の活動

▼2011/06/10（金） 2010 年度第 6 回例会（琉大法文学部 211 地理実験室，18:30～20:00） 発表者：堀本雅章（法政大沖縄文化研究所），題目：「慶留間島における架橋に対する島民意識」

編集後記　6 月 9 日沖縄地方は梅雨が明けました（統計開始以降最早を記録）。▼今号からレイアウトを変更しました。また，コラムを始めました。ご寄稿いただいた**小川護**さん，**崎浜靖**さんありがとうございます。コラムへの投稿をはじめ，掲載希望の原稿がございましたら是非お寄せくださいませ。▼学会活動に対するご意見やご希望など――例えば，**巡検希望場所**，**テーマ**など――もお聞かせ頂ければ幸いです。▼今号から編集子が**廣瀬孝**さんから渡久地にバトンタッチしました。廣瀬さん長年お疲れ様でした。慣れぬ仕事，今号は発行が遅れました。（と）